

令和4年度学校推薦型選抜最終選考小論文課題

東京大学教養学部教養学科

受験番号

氏名

本冊子は、指示があるまで開かないこと。

課題開始後、表紙に受験番号、氏名を必ず記入すること。

解答用紙は、両面1枚のみとする。

草稿用紙としてB4用紙2枚を使用してよい。

本冊子は、終了後に回収する。持ち帰らないこと。

本冊子

表紙 1枚

白紙 1枚

課題 2枚

小論文課題（教養学科）

次の文章を読み、以下の設問に答えなさい。

(一) 傍線部について、筆者の言う悪循環とは何を意味するでしょうか。十行以内にまとめて述べなさい。

(二) この文章に続けて、筆者は、日本語が「亡びる」運命をさけるには、学校における英語教育と日本語教育はどうあるべきかを検討しています。そもそも日本語が「亡びる」ことに筆者は何の危機を感じているのでしょうか。そして、この筆者ならば、どのような学校教育論を展開するだろうとあなたは想像しますか。その理由も含めて述べなさい。

〈学問の言葉〉が英語という〈普遍語〉に一極化されつつある事実は、すでに多くの人が指摘していることである。だが、その事実が、英語以外の〈国語〉に与える影響にかんしてはまだ誰も真剣に考えていない。〈学問の言葉〉が〈普遍語〉になるとは、優れた学者であればあるほど、自分の〈国語〉で〈テキスト〉たりうるものを書こうとはしなくなるのを意味するが、そのような動きは、〈学問〉の世界にとどまりうるものではないのである。〈学問〉の世界とそうではない世界との境界線など、はっきりと引けるものではないからである。英語という〈普遍語〉の出現は、ジャーナリストであろうと、ブロガーであろうと、ものを書こうという人が、〈叡智を求め人〉「引用者注1」であればあるほど、〈国語〉でテキストを書かなくなっていくのを究極的には意味する。

そして、いうまでもなく、〈テキスト〉の最たるものは文学である。

一回しかない人類の歴史の中で、あるとき人類は〈国語〉というものを創りだした。そして、〈国語の祝祭〉とよばれるべき時代が到来した。〈国語の祝祭〉の時代とは、〈国語〉が〈文学の言葉〉だけでなく〈学問の言葉〉でもあった時代である。さらには、その〈国語〉で書かれた〈文学の言葉〉が、〈学問の言葉〉を超越すると思われていた時代である。

今、その〈国語の祝祭〉の時代は終わりを告げた。

一度火を知った人類が火を知らなかった人類とちがうよう、あるいは、一度文字を知った人類が文字を知らなかった人類とちがうよう、一度〈国語〉というものの存在を知った人類は、〈国語〉を知らなかった人類とはちがう。美的のみならず、知的、倫理的な重荷を負うものとして〈自分たちの言葉〉で読み書きするのを知った人類は、地球規模の〈普遍語〉が現れたといっても、即、深い愛着をもつに至った〈国語〉に、知的、倫理的、美的な重荷を負わせなくなることはないであろう。だが、〈普遍語〉と〈普遍語〉にあらざる言葉が同時に社会に流通し、しかもその〈普遍語〉がこれから勢いをつけていくのが感じられるとき、〈叡智を求め人〉ほど〈普遍語〉に惹かれていってしまう。それは、春になれば花が咲き

秋になれば実が稔るのにも似た、自然の動きに近い、ホモ・サピエンスとしての人間の宿命である。

悪循環がほんとうに始まるのは、〈叡智を求める人〉が、〈国語〉で書かなくなるときではなく、〈国語〉を読まなくなるときからである。〈叡智を求める人〉ほど〈普遍語〉に惹かれてゆくとすれば、たとえ〈普遍語〉を書けない人でも、〈叡智を求める人〉ほど〈普遍語〉を読もうとするようになる。「・・・」読むという行為と書くという行為は、本質的に、非対称なものであり、〈普遍語〉のような〈外の言葉〉を読むのは、書くのに比べてはるかに楽な行為である。すると、〈叡智を求める人〉自身が、自分が読んでほしい読者に読んでもらえないので、だんだんと〈国語〉で書くとは思わなくなる。その結果、〈国語〉で書かれたものはさらにつまらなくなる。当然のこととして、〈叡智を求める人〉はいよいよ〈国語〉で書かれたものを読む気がしなくなる。かくして悪循環がはじまり、〈叡智を求める人〉にとつて、英語以外の言葉は、〈読まれるべき言葉〉「引用者注2」としての価値を徐々に失っていく。〈叡智を求める人〉は、〈自分たちの言葉〉には、知的、倫理的な重荷、さらには美的な重荷を負うことさえしだいに求めなくなっていくのである・・・

歴史は皮肉なものである。

ほぼ一世紀半前、日本の学問の府は大きな翻訳機関として、日本語を学問ができる言葉にした——日本語を〈国語〉にした。それが、今、英語が世界を覆う〈普遍語〉となるにつれ、日本の学問の府は、大きな翻訳機関に留まるのをやめようとしているのである。名ばかりの大学となり果てた日本の大学ではもちろん日本語が中心にあり続けるであろう。だが、すでに、日本の大学院、それも優秀な学生を集める大学院は、英語で学問をしようという風に動いてきている。特殊な分野をのぞいては、日本語は〈学問の言葉〉にはあらざるものに転じつつある。

一人の小説家として——それ以前に、一人の日本人として、このような動きがこの先日本語に与える影響を考えないわけにはいかない。

出典 水村美苗『増補 日本語が亡びるとき——英語の世紀の中で』（ちくま文庫、二〇一五年）

引用者注

- 1 〈叡智を求める人〉・・・筆者は、引用箇所先立つ文章の中で、〈叡智を求める人〉を「自分が知っている以上のことを知りたい欲求の強い人たち」と説明している。
- 2 読まれるべき言葉・・・筆者は、引用箇所続く文章の中で、〈読まれるべき言葉〉を讀みつづのが文化であるとしている。

以上

令和4年度学校推薦型選抜最終選考小論文課題

東京大学教養学部学際科学科

受験番号 _____ 氏名 _____

本冊子は、指示があるまで開かないこと。

課題開始後、表紙に受験番号、氏名を必ず記入すること。

解答用紙は、両面1枚のみとする。

本冊子は、終了後に回収する。持ち帰らないこと。

本冊子

表紙 1枚

白紙 1枚

課題 2枚

草稿用紙 2枚

東京大学教養学部

小論文課題

次の文章を読み、問題に答えなさい。

「文系と理系に分けるのは日本だけ」という話をよく聞きます。日本については後述することにして、結局欧米ではどうなのか、ということを考えてと思います。

欧米諸国では受験のときに「文系」「理系」の二つではなく、「人文」「社会」「理工医」の三つ、あるいはそれ以上に分かれるのが確かに普通です。しかし学問の分裂を「二つの文化」と捉える見方も、長らく存在してきました。いや、正確に言えば、20世紀初頭のリッケルトのように、二つに分ける考え方と三つ以上で捉える考え方が併存していたというべきでしょう。

その上で、影響力を持ったと思われるのが、1959年に英国人のチャールズ・パーシー・スノウが著した『二つの文化と科学革命』です。彼はその中で、「科学的文化」と「人文的文化」の隔絶を説きました。スノウ自身は、両者が対立するべきではないとしながらも、アメリカやソ連といった国の理工系教育への意気込みを紹介し、「科学的文化」の方に軍配を挙げたため、物議を醸しました。彼の主張の妥当性はここでは問いません。ただ、指摘したいのは、「学問は多様なんだけど、とりあえず二つに分けて考える」感覚が、それ以降、欧米でも定着しているようにみえるということです。

これまでに出版された本のデータから調べる限り、1960年代以降、フランス語圏や英語圏で、人文社会科学（英語で Humanities and Social Sciences、略して HSS）という単語の使用頻度は増加しています。英語圏ではとりわけ、HSS が自然科学・工学と医学 (Science, Technology and Medicine、すなわち STEM) と並べて用いられます。日本語で言えば、「人文社会系」と「理工医系」といったところでしょうか。「文系」「理系」ほど単純な二分法ではないですが、二つに分ける感覚は表れています。

とはいえ、「人文社会」「理工医」は、学問の内実だけではなく、大学教育が発展した経緯など、制度的な事情を大いに孕んでいるのも事実です。それがなければ、諸学問を二つに分ける理由はないのでは、そして、本来、諸学は一つなのではないか、という議論も成り立ちます。

それに対する私の現時点での答えは、イエスであり、ノーでもあります。確かに、「人文社会」「理工医」の二つに分ける区別は絶対ではない。しかし、諸学は一つとも言えない。そこには少なくとも、二つの違う立場が存在するのではないか、と思うからです。前述のように、自然科学と人文社会科学の諸分野には、それぞれ固有の対象を見つけて、宗教や王権から自律していくという歴史的経緯がありました。そして、その自律には、主に二つの異なる方向性がみられます。

一つは「神の似姿である人間を世界の中心とみなす自然観」から距離を取るという方向性です。それは、人間の五感や感情からなるべく距離を置き、器具や数字、万人が共有できる形式的な論理を使うことで可能になりました。文字通り、「客観的に」物事を捉えようとしたわけです。その結果、たとえば地球は宇宙の中心ではないし、人間は他の動物に対して特別な存在でもないという自然観につながりました。

もう一つは、神（と王）を中心とする世界秩序から離れ、人間中心の世界秩序を追い求める方向性です。すなわち、天上の権威に判断の根拠を求めるのではなく、人間の基準でものごとの善し悪しを捉え、人間の力で主体的に状況を変えようとするのです。その結果、たとえば、この世の身分秩序を「神が定めたもの」と受け入れるのではなく、対等な人間同士が社会の中でどう振る舞うべきかをさぐったり、人間にとっての価値や意味を考えたりするための諸分野がうまれました。

すなわち、前者にとって、「人間」はバイアスの源ですが、後者にとって「人間」は価値の源泉であるわけです。断言はできませんが、どちらかといえば、前者は理工系、後者は人文社会系に特徴的な態度といえるでしょう。もちろん、経済学の幾つかの学派や、医学のように、どちらともいえない分野もあります。いずれにせよ、両者は共に何らかの権威から自律することで近代的な学問となったのですが、別の方向を向いています。そこには、完全には融合しきれない、違いが残り続けるのではないのでしょうか。

出典：隠岐さや香『文系と理系はなぜ分かれたのか』（2018年）（一部変更）

問題

- (1) 文系と理系の区分に関して、その歴史と現状について著者はどのように説明し、その上で著者自身の考えをどのように述べていますか。それぞれを要約して述べなさい。
- (2) (1) で要約した文系と理系の区分の仕方、著者の考えに対して、あなたはどのように考えますか。自分の考えを述べなさい。
- (3) 大学に入学して以降にあなたが学習し、研究しようとしていることについて簡潔に述べなさい。そのために、あなたはどのような文系の学問と理系の学問を学ぶ必要があると考え、それらをどのように学んでいくつもりですか。上の問題文や問題へのあなたの解答に関連すればそのことに言及しつつ、今考えていることを述べなさい。

以上

東京大学教養学部

草稿用紙

令和4年度学校推薦型選抜最終選考小論文課題

東京大学教養学部統合自然科学科

受験番号 _____ 氏名 _____

本冊子は、指示があるまで開かないこと。

課題開始後、表紙に受験番号、氏名を必ず記入すること。

解答用紙は、両面1枚のみとする。

本冊子は、終了後に回収する。持ち帰らないこと。

本冊子

表紙 1枚

白紙 1枚

課題 1枚

草稿用紙 2枚

東京大学教養学部

白紙

小論文課題

以下の設問に答えなさい。

必要に応じて自筆の図を用いてもよいものとします。

第一問

Aさん、Bさんという2名の被験者がいます。この2名のそれぞれが感じる「味の知覚（味覚）*」がどの程度同じか・違うかを検証する実験を計画し説明しなさい。その際、実験者が操作するもの、測定するもの、統制するものについて、詳しく具体的に記述しなさい。

* 外界からの刺激は、感覚器官を通して脳神経活動をひきおこし、自覚的な体験となります。「知覚」とは、外的な刺激に対する神経細胞の反応を超えた、内的で自覚的に体験されるものを意味します。

第二問

コンピュータとヒトの脳の情報処理の方法について類似点と相違点を挙げ、ヒトの精神活動をコンピュータで再現しようとした場合に課題となりうる点について述べなさい。ただし、コンピュータの演算能力には制限がないものとします。

以上

東京大学教養学部

草稿用紙

東京大学教養学部

令和4年度学校推薦型選抜最終選考小論文課題

東京大学教養学部 国際環境学コース

受験番号 _____ 氏名 _____

本冊子は、指示があるまで開かないこと。

課題開始後、表紙に受験番号、氏名を必ず記入すること。

解答用紙は、両面2枚のみとする。

草稿用紙として、B4用紙2枚を使用してよい。

本冊子，解答用紙，草稿用紙は、終了後に回収する。持ち帰らないこと。

本冊子

表紙 1枚

白紙 1枚

課題 1枚

東京大学教養学部

白紙

小論文課題

(Essay questions)

Write your answers in English.

Question 1: In what ways can technology have a negative impact on our quality of life?

Question 2: Is the widening of inequalities damaging to society? Or is it necessary to stimulate competition?

以上

東京大学教養学部